View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE
provided by Okayama University Scientific Achievement Repository

岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要第39号（2015.3）

日英語における勧誘表現の叙述的な機能について

鷲　野　亜　紀

１．はじめに

日本語にも英語にもいわゆる勧誘表現がいくつか存在するが、その中でも、非疑問化形式であるという共通点を持つ日本語の「しよう」と英語の'Let's'においては、次の日本語の用例(1)〜(4)、英語の用例(5)〜(8)のように、それぞれ動作主体が１人称の「自分自身への働きかけ」、「意志の表明」、１・２人称の「勧誘」、２人称の「婉曲な命令」といった機能がみられる。

(1)　そろそろ始めよう。＜自分自身への働きかけ＞
(2)　それは私が判断しよう。＜意志の表明＞
(3)　おなかがすいた。食事に行こう。＜勧誘＞
(4)　図書館の中だから、静かにしよう。＜婉曲な命令＞
(5)　Let's go in for the kill.（いよいよ王手をかけるぞ。）
（Randy Mayem Singer, Lesrie Dixon “Mrs.Doubtfire”）＜自分自身への働きかけ＞
(6)　Let 's get you to the shore.（海岸にお連れしましょう。）
（Maureen Crane Wartski “Boys' Life” 2007（May））＜意志の表明＞
(7)　Let's go home.（家に帰ろう。）（Lan, Ly “Singing Grass”）＜勧誘＞
(8)　Let's wake up now, buddy, come on!（目を覚ましてよ、ねえ、ほら！）
（“Mrs.Doubtfire”）＜婉曲な命令＞

しかし、日本語でも英語でも、こうした「働きかけ」の機能の枠におさまらない次のような用例がみられる。

(9)　単焦点の固定レンズなんだから、ファインダーはオプションではなく内蔵しようよ。（google/bbs.kakaku.com 2013/03/05 22:11 ）

(9)　は、google上にある、カメラ購入者の感想がのっている掲示版である。このページでは、購入者の満足度に応じて星の数が示され、それと共に購入後の感想が記されている。購入予定者は購入前にこれらの感想を読んで、買うかどうかを判断したりするわけである。ここでは、既に商品となって

発売されているカメラのファインダーがオプションとなっていることに対して「内蔵しようよ」と述べているが、今後「内蔵」することを働きかけているのではなく、「内蔵してほしいのに内蔵していない」ことに対する不満が述べられている、と考えられる。

また、次の英語の用例（10）（a）においては、従属節に'Let's'が現れている。'Let's'が働きかけとして機能する場合、'Let's'は主節に現れる。従属節に現れる（10）（a）のような用例では、主節において話し手は「主張」をしており、'Let's'は理由の中で用いられているに過ぎない。そのため、従属節の中の'Let's think about it 'に対する、'Yes, let's 'や'Sure.'などという応答を期待して発話されているわけではない。一方主節に'Let's'が現れている（10）（b）では、'Let's think about it overnight.'という話し手の働きかけに対して、聞き手は'Sure.'と答えている。そういう意味では、（10）（b）に比べて（10）（a）は働きかけから叙述への傾きがみられる。

（10）（a）　I argue that it is exactly the time for this amendment because <u>let's think</u> about it.（"Congressional Record" US Congress - 2006）
（私は今こそ改正すべき時だと主張します。そのことを私達は考えるべきだからです。）

（b）"Look, <u>let 's think</u> about it overnight. Maybe we'll come up with something. " " Sure, I gotta split now, anyway, " David said.
（「それについては夜通し考えることにしよう。多分何か思いつくだろう。」「いいとも、どっちにしても今はもう行かなくちゃ。」）
（Walter Dean Myers 'PLANE CRAZY' sourse:"Boys Life" 2006（May））

本論文では（９）や（10）（a）にみられるような、働きかけ性を弱め叙述に傾いた機能が、日本語と英語のそれぞれで働きかけの機能とどのように関わっているのか、どういう条件で現れるのか、といったことについて考察し、さらに日本語と英語での対照を試みたい。

次の２－１では、もう少し詳しく、本論文でどういう機能を指して「叙述」と捉えるのか、ということについて述べたい。

２　先行研究

２－１．「叙述」をどう捉えるか

宮崎・安達・高梨・野田（2002）では、日本語における基本叙法として、「実行」と「叙述」を立てている。「実行」とは「意志」「命令」などであり、「叙述」のモダリティとは「評価」と「認識」の形式である、とされている。「評価」とは「命題内容に対する話し手の評価的な捉え方を示すもの」

であり、「たらいい」「べきだ」などの形式である。「認識」とは「命題内容に対する話し手の認識的な捉え方を表す」ものである。日本語では例えば「～だろう」などである。

本論文では、宮崎・安達・高梨・野田（2002）における「叙述」の捉え方を採用し、「意志」「命令」などの「実行」と対立するものとして捉える。そして、「叙述」と「実行」は必ずしもはっきりとどちらかに区別されるものではなく、これら二つの働きは連続的であると考える。

また、発話行為には、「叙述性」とでもいうような、ある命題に対する話し手の「評価」や「認識」が必ず存在し、それが望ましい事象に結びつくようはたらきかける「実行性」もしくは「働きかけ性」といったものが生じると、働きかけとして機能すると本稿では考える。叙述性が顕在化し、その判断を実行に結びつける働きかけ性がほとんど感じられない発話は存在するが、働きかけには必ず前提として、話し手のその事象に対する評価としての叙述性が存在するように思われる。そのように考えると、働きかけ的か、叙述的か、ということは、働きかけ性と叙述性のどちらがより強く、その発話の中心的な発話の力として発現するかということなのではないだろうか。

宮崎（2007）では、「未実現の（ポテンシャルな）事象への言及にかかわる文」として「＜まちのぞみ＞が顕在している文」である＜まちのぞみ文＞と「＜まちのぞみ＞が動機・前提となって、話し手が主体にその発動を指令するために使用される文」である＜発動文＞が、ともに＜まちのぞみ＞を有しているために、互いに「接近・移行」していくこと、つまり、「まちのぞみ文」が「含みとして発動性を生じさせ」たり、逆に「「発動文」が「発動性」を失い、潜在していた＜まちのぞみ＞が前面化する」ことが起こったりするということが述べられている。

本稿で扱ういわゆる勧誘表現もまた、宮崎（2007）における＜発動文＞のひとつとして、潜在的に＜まちのぞみ＞を有する、という考え方で叙述的な機能への傾きが説明されるだろう。日本語の「しよう」という形式で、例えば２人称が動作主体となる「婉曲な命令」は、過去のすんでしまった事象に対しては働きかけとしては機能しないため、「＜まちのぞみ＞がかなえられなかった」という不満を述べるという叙述的な機能へと傾く。

ここまでをまとめると、本論文では、「叙述」を、宮崎・安達・野田・高梨（2002）において述べられる日本語の基本叙法としての「叙述」の捉え方に従って「評価」「認識」として考え、日本語だけでなく、英語においても採用したいと思う。すなわち、「叙述」とは、発話の命題に対する話し手の「評価」「認識」であり、聞き手に対する「働きかけ性」が文の第一義として前面に出ていないものをいうこととする。

以上のように、本論文では、「叙述的な機能」とは、「評価」「認識」を述べる機能と考えてみていくことにする。このような「評価」「認識」は、主節で用いられるだけでなく、話し手のコメントとして主節に添えられた形で現れることもある。

次の２－２では、働きかけの形式と叙述的な機能の関わりについてふれた先行研究について少しみておくことにする。

２－２．叙述的な機能

いわゆる「働きかけ」として機能する表現の叙述的な機能については、いくつかの研究がされている。

日本語の研究に関しては、尾崎（2007）で、日本語の否定命令文「スルナ」が「時」と「意志性」を軸として、「不満の表明」「非難」などの叙述的な機能を示すことが述べられている。

また、山下（2013）では「シヨウヨ」が「非難」・「願望表出」を表す場合の用法について、日本語教育の立場から論じている。日本語の場合、「しよう」が「不満」や「非難」などのコメントとして機能する場合、しばしば「よ」と共起する。山下（2013）で「シヨウヨ」という形式で取り上げられているのはそのためであると思われるが、聞き手に対して直接述べる場合、話し手が聞き手に対して遠慮があったり、また、強い調子になることを避けようとすれば、「よ」はつきにくく、「しよう／しましょう」という形式で用いられることも可能であると思われる。また、本稿で取り上げる「人称」のずれによって叙述的な機能が生じる場合について言えば、３人称が動作主体となる場合、聞き手に向かっての発話では、「しよう／しようよ」は用いられないが（(11)（ａ）参照）、日記やインターネット上のブログなどでは、３人称に言及する場合に「しようよ」を用いるという特徴がみられる。（(11)（b）参照）

（11）（a）（友達との会話の中で、その場にいない美代子という友人について）*美代子は、もう少し愛想よくしようよ。

（b）（日記の中で・あるいはインターネットのブログで）美代子は昨日も無愛想だった。もう少し愛想よくしようよ。

英語では、Clerck（2002）において、テキストの性質によって分類した'Let's'の語用論的な機能が述べられている。中でも 'Let's face it'、'Let's say', 'Let's be honest'のような表現を評言型語用論的形成要素（pragmatic formatives of the commentary type）とし、その他 'Let's not get touchy touchy'という発話の例を引いて、「聞き手の行動評価（evaluation of the hearer's behavior ）」として'Let's'の語用論的機能の分類を試みているのが興味深いが、あくまでもテキストによる分類が主であり、語用論的な機能の整理がされているわけではない。

宮崎（2007）では、２－１で述べたように、＜まちのぞみ文＞と＜発動文＞が互いに接近・移行するのを、これらの文がともに＜まちのぞみ＞を有するということで説明しており、これは未実現の事象に対する言及についての記述であるが、未実現の事象だけでなく、時に関する語用論的な条件が変わった場合の叙述的な機能の説明にも有効であると思われる。

叙述的な機能を持つ形式が二次的に働きかけの機能を持つことについては既に多くの研究がされて

いるようであるが、働きかけの形式が叙述的な機能を持つことについての詳しい研究はあまりされていないように思われる。また、対照研究もほとんどみない。次節では、本論文では実際にどのような方法で、日本語と英語の勧誘表現「しよう」と'Let's'の叙述的な用例を考察し対照していくのか、ということについて述べることにする。

３．対照の方法について

日本語と英語における勧誘表現の叙述的な機能を対照するにあたり、どのような視点で対照を行うかということは重要である。そして、さまざまな用例が「叙述的」であるということをどう判断するのか、ということも確認しておかなければならない。「叙述」をどうとらえるかということについては前節で述べたが、働きかけ性の強い発話と、叙述性への傾きが強い発話は互いに連続していると考えられるため、これらのどちらであるかという判断が非常に難しい場合がある。

ここでは、Searle（1969 ）の発話行為理論を参考にしたい。すなわち、働きかけの行為を行うということは、聞き手が存在すると言うことを意味し、それは言い換えれば、その場にいない第三者に対して直接働きかけを行うことはできないということである。つまり、働きかけというものは、３人称に対して行われることはできない。３人称に対して働きかけの形式を用いていれば、叙述的な機能に傾いていると判断することができるのではないだろうか。このように考えると、日英語の対照を行う際にも、「人称」は言語を超えた対照の軸として用いることができる。

また、適切性条件（Searle（1969））により、働きかけは未来の行為に対して行われるものであり、遂行済みの行為に対して働きかけを行うことはできない。この点については、仁田（1991）など多くの研究者が言及していることである。二つ目の対照の軸として、「時」を設定する。

ここまでの二つの視点は語用論的な視点であるが、最後の一つは文法的な視点である。

日本語でも英語でも、聞き手に対する直接的な働きかけとしての表現は、主節にあらわれ、従属節には表れないはずである。文のどの位置に現れるか、ということもまた、「実行」と「叙述」のどちらへ傾くかということの判断材料となるはずである。

本論文は、２－１で述べたような意味で「叙述」に傾いた勧誘表現の機能を分析し、どのような要因で叙述的な機能が生じるのか、また、こうした叙述的な機能が働きかけの機能とどのように関わっているのかを考察すること、さらに日本語と英語での対照を目的とする。なお、考察のための用例は日本語については、「現代書き言葉均衡コーパス少納言」、英語についてはCOCA（Corpus of Contemporary American English）を中心に、その他コーパスGBAE（Google Books American English）、映画の脚本、小説などから採集した。英文の解釈等については、英語の母語話者１名の協

力を仰いだ。[1]

４．日本語の勧誘表現「しよう」における叙述的な機能

４－１．　日本語の勧誘表現「しよう」における叙述的な機能の考察

日本語の勧誘表現のひとつである「しよう」形は、意志形でもある。「しよう」は一人称を動作主体とする「意志」、１・２人称を動作主体とする「勧誘」、２人称を動作主体とする「婉曲な命令」まで連続的な機能を持つ。

しかし、下の（12）は、こうした枠組みの中におさまりきらない機能を示している。

（12）質問：どうしたら日本語に直るんでしょうか？HELPを見ても、英語なのでさっぱりわかりません！！

回答：Macを使ってるのかWindowsを使ってるのかぐらいは書きましょうよ。アドバイスのしようがないですよ。（少納言データ中の「Yahoo! 知恵袋」から）

（13）ふたりのお母さん・・・・うんうん、いいね～～！これさ、もっと早く聞かせてあげようよ。いざというときの魔法のお話・・なのかな？もうひとりのお父さん・・・ずっとずっと想ってるはずなんだよね。（少納言データ中のyahoo!ブログ/2008から）

（14）（ドライブ旅行の全日程を決めたあとで、車に弱くて酔うかもしれない、という聞き手に）そういうことは、先に言いましょう。

（15）単焦点の固定レンズなんだから、ファインダーはオプションではなく内蔵しようよ。（（９）再掲）

（16）（子供を連れて散歩中に知人と出会った後、子供に）挨拶ぐらいしようね。感じ悪いよ。

（12）は、すでに書きこまれたインターネット上の質問に対する答えとして、「しよう」の丁寧体「しましょう」を用いた「書きましょうよ。」が、回答者のコメント（非難）として用いられている。今後は書いてほしい、という働きかけの意味も少しは感じられるものの、むしろ質問者が書いていないことへのいらだちが表れていると考えられ、叙述的な機能への傾きが感じられる。（13）では、「もっと早く」という表現があるために、「聞かせてあげようよ。」の働きかけとしての解釈が弱まり、「もっと以前に聞かせてあげればよかったのに」というような、既にタイミングが過ぎた事象への「評価」として捉えられる。

２－２でも述べたように、山下（2013）では、日本語教育の立場から、「しよう」に終助詞「よ」

[1] 英文の解釈等について、Sarah Blenkhorn氏にご協力いただいた。この場を借りて、感謝申し上げたい。

がついた「しようよ」という形式で、「非難」の用法があると指摘している。確かに「よ」にはそのような用法を生じやすい機能が備わっているようにも思われるが、「しよう」単独でも「非難」の用法は生じるように思われる。（14）の例は作例であるが、強い口調になりすぎないようにという意図が働けば、このように「よ」をつけずに言うことも可能ではないかと思われる。ここでは、すでに過ぎてしまった「言う」べきタイミングについて、「先に言う」という話し手の望ましさという「評価」を述べていると解釈できる。「よ」を共起させるとより自然である。

さらに（15）は、インターネット上で述べられた、新しく発売されたカメラについてのコメントである。すでにカメラは発売されているので、これから遂行される行為への働きかけという機能は持っていないし、また、そのカメラメーカーの設計者が偶然そのコメントを目にすることはあるかもしれないが、聞き手としてカメラメーカーの誰かを設定しているわけではない。一種の「ぼやき」のようなコメント、感想として機能しているわけである。３人称が動作主体となるという点で、（12）～（14）とは異なっている。これもまた「叙述」に傾いた例である。

（16）では、たった今挨拶しなかった、ということに対する「非難」と、今後は知り合いに出会ったら挨拶するように、という「働きかけ」の両方が機能しているように思われる。ここでの働きかけは、「ぐらい」という表現があるために、「世間一般では知り合いに出会ったら挨拶をするものだ」という普遍的な行動規範の提示といった「社会的提案」のような意味合いを帯びた「婉曲な命令」であるだろう。このように、聞き手の直前の行為や発言に対して「しよう」を用いた場合、反復性のある行為であれば、「過去」の事象に対する叙述的な機能と、今後起こりうる事象についての働きかけの機能との両方が現れる。こうした例は、働きかけの機能と叙述的な機能の連続性を示すものである。

（12）～（15）の例は（16）と比べると、いずれも比較的はっきり叙述的な機能が前面に出てきた用例となっている。これらの用例が叙述的な機能を生じている要因は、「時」（（12）～（14））と「人称」（（15））である。２節で述べたように、Searle（1969 ）の発話行為理論では、働きかけの機能は、未遂行の行為に言及する発話において機能するのであって、遂行済みの行為については機能しない。また、聞き手に対する発話としてならば働きかけの機能を持つ場合でも、聞き手に対する発話の中で、３人称が動作主体となる行為に言及する場合には、３人称への働きかけとしてではなく２人称に対して３人称への評価を述べる、叙述的な機能を持つことになる。

これは言い換えれば、「未来」の行為に対して言及するものであれば働きかけとして機能するものが、文脈などの語用論的条件から、行為遂行が過去であると判断される場合には、働きかけの機能が弱まり、別の機能が強くなる、ということである。また、「動作主体が１・２人称、２人称」であれば働きかけの機能が前面に出ている場合に、語用論的条件から動作主体が３人称であると判断される場合には、働きかけの機能が弱まる、ということである。

「働きかけ」と、話し手の命題に対する「評価」「認識」を述べる「叙述」とは、連続的であると先に述べたが、上記の「時」「人称」についてもそれは言えるのであって、「未来の事象」に対する「婉

曲な命令」として機能している発話（(17)）の、語用論的条件を過去にずらすと、叙述的な機能への傾きがみられるし（(14)、以下に再掲）、２人称が動作主体となる「婉曲な命令」（(18)（ａ））の動作主体が３人称にずれると、働きかけ性は弱まり、叙述的な機能への傾きが強まる。（(18)（ｃ）における「ぼやき」）２人称に対して３人称に言及する場合、「しよう」は用いられない。（(18)（ｂ））

（17）（教師が遠足の説明を児童にしながら）車に乗ると酔う人は、先に言いましょう。バスの席を前にしてあげます。

（14）（ドライブ旅行の全日程を決めたあとで、車に弱くて酔うかもしれない、という聞き手に）そういうことは、先に言いましょう。（再掲）

（17）ではこれから、バスの席を決める前に「言う」という行為を行うよう、子供たちに「婉曲な命令」として働きかけていると解釈できる。既に挙げた（14）と同じ「先に言いましょう」という発話をしていても、（14）において語用論的に理解される「時」は（17）のような「未来」ではない。

（18）（ａ）（小学校の音楽の時間に教師が子供たちに）もっと大きな声で歌おう。

（18）（ｂ）（教師がその場にいない恭子という生徒に言及して、）* 恭子さんは、もっと大きな声で歌おう。

（18）（ｃ）（ブログ、あるいは日記に）恭子さんは、今日とても小さな声で歌っていた。合唱コンクールも近いのだから、もっと大きな声で歌おうよ。

このように日本語では、働きかけとして機能する「しよう」において、文脈などから判断される「時」と「人称」という語用論的な条件をずらした場合に、叙述的な機能への傾きがみられる。

５．英語の勧誘表現 'Let's' における叙述的な機能

'Let's' は 'Let us' の縮約形である。'Let's' についての考察に入る前に、英語における１人称複数形 'we' について、少しふれておきたい。

５－１．英語における 'we'

英語という言語においては、形態的、語彙的に 'inclusive we'（包括形）と 'exclusive we'（排除形）を区別しない。そこからさまざまに曖昧な表現が生じ、またそこにさまざまな機能が生じる余地があると思われる。

Scheibman（2004）では、英語における１人称複数形 'we' が 'inclusive we' を表す場合と 'exclusive

we’を表す場合について、どのような環境にこれら二つが生起するか比較、考察しており、‘inclusive we’が法助動詞などの‘modal’な述語との共起頻度が高く、こうした用法では直接的な叙述（direct assertion）を橋渡し（mediate）する機能を持つ、としている。勧誘表現として機能する英語の‘Let’s’や‘Shall we~?’における‘us’や‘we’は‘inclusive we ’であり、聞き手を含むとされているが（Quirk et al.（1985））、こうした‘we’でも、そうした一種の緩衝機能は存在すると思われる。

また、Huddleston and Pullum（2002）では、‘we’が実際には話し手のみ、聞き手のみ、を表す場合に迂言的に’we’が用いられる用法について述べている。

一方、安井他（1987）では、話し手を基準とした‘inclusive we’、‘exclusive we’とは異なり、「まず聞き手があって、話し手はそれに同化する形で」‘we’を用いる‘paternal we’について言及している。この場合、動作主体は聞き手であり、話し手と聞き手の間に、親と子、先生と生徒、医者と患者というような一定の対人関係が成り立っているときに使われる用法、とされている。

実際の用例を観察してみると、‘Let’s’における‘we’が必ずしも話し手と聞き手を含むとは限らず、話し手のみ、聞き手のみの解釈が可能である場合があるということがわかる。そこから、実際には動作主体が１・２人称となる「勧誘」の機能に限らず、１人称が動作主体となる「自分自身への働きかけ」、「申し出」、聞き手のみが動作主体となる「婉曲な命令」などの機能が生じると考えられる。そしてまた、そうした動作主体の解釈の幅を許す曖昧さから、一種の緩衝機能が生じていると考えられる。

この英語における‘we’の幅を持った解釈による緩衝機能が‘Let’s’にも受け継がれ、‘Let’s’の解釈の幅、機能の広がりにも影響を与えていると考えられる。

５－２．英語の‘Let’s’における叙述的な機能

英語のいわゆる勧誘表現である‘Let’s’の用例を観察してみると、１人称が動作主体である「自分自身への働きかけ」から、動作主体が１・２人称である「勧誘」、動作主体が２人称である「婉曲な命令」まで、動作主体を軸とした連続的な働きかけの機能を持つことがわかる。

いわゆる勧誘表現としての形式である‘Let’s’は、勧誘としての機能が中心的であるために、聞き手に対して何らかの働きかけを行う機能が強く前面に出ていると考えられるが、働きかけの機能よりも、話し手の判断や評価を述べる叙述的な機能が前面に出ているものもまた存在すると考えられる。また、働きかけの機能と叙述的な機能の両方が感じられるものから、叙述的な機能にかなりの程度傾いていると考えられるものまで、働きかけ性と叙述性とは連続的である。

本節では、こうした叙述的な機能への傾きがみられる‘Let’s’の用例をもとに、どのような要因で叙述的な機能への傾きが生じるのか、ということを論じていきたい。

５－２－１．　語用論的な条件で、叙述的な機能への傾きが生じる場合

はじめに、２節で述べたように、対照する際の軸としての「時」と「人称」がずれた場合について考えてみることにする。

語用論的な条件で叙述的な機能が生じるのは、Searle（1969）で述べられる、発話行為における適切性条件が成立しない場合である。働きかけの発語内行為として成立するためには命題内容条件として、該当の行為Ａが未来の行為である必要があるが、過去の行為であれば、働きかけ性は失われる。また、適切性条件のうち、準備条件、誠実性条件、本質条件のいずれにも関わるものとして、話し手Ｘは２人称である聞き手Ｙに対して発話行為を行うことになるが、第３人称に対して行う場合、働きかけ性は失われる。２人称に対してであれば「婉曲な命令」として解釈される発話が、条件をずらすことで叙述的なものになるわけであり、働きかけの機能との連続性がみられる。

（19）" Come on, people, let 's be serious for a minute, " Leigh said.
（Weisberger, Lauren/ ‘Chasing Harry Winston’/2008）（さあ、みなさん。しばらく真面目に。）

（20）First, he said he was a historian, now he's a strategic adviser. I mean, let 's be serious.
（NBC_MeetPress /2012（120122））（最初彼は、自分は歴史家だと言った。今では彼は戦略アドヴァイザーだ。真面目にやってほしいよ。）

（19）の ‘let 's be serious’は聞き手に対しての「婉曲な命令」として解釈され得る。しかし、（20）では、この場にはいない３人称である「彼」がころころと名乗り方を変えていることに対して、話し手の抱く望ましさ‘be serious’に反して‘not be serious’であるという「評価」が、‘Let’s be serious.’という形式で述べられていると考えられる。３人称である「彼」が既に言ったことに対する「評価」であり、未実現の行為に対する言及ではない。このように人称がその場にいない３人称へとずれると、その行為の動作主に対する発話ではないという点で働きかけ性を失い、叙述的な機能への傾きが認められる。

また、次の（21）でも、動作主体は３人称である。また、この発話は、過去に行われた病院への寄付の金額についての「評価」であって、これもまた「未実現の行為に対する言及」ではなく、過去の事象に対するコメントである。「時」も「人称」も通常の働きかけの場合からずれた用例であり、働きかけの機能から叙述的な機能への傾きがみられる例である。

（21）Mr-FAHRENKOPF: The first grant's $ 140,000.（最初の寄贈金は14万ドル。）
Rev-GREY: A hundred forty-thousand -- now, let's･･･let 's be big. That's chump change.（CBS_Sixty/ 1997（19970817））

（14万ドル…もっと多くなくちゃ。それじゃ取るに足らない金額だ。）

以上のように、 英語のいわゆる勧誘表現のひとつである‘Let's’は、語用論的な条件のずれから、叙述的な機能への傾きを示すことがある。

５－２－２．　従属節に現れる場合

‘Let's’が働きかけの機能をもつとき、’Let's’は主節の冒頭に現れる。しかし、そうではない場合がある。

（10（a）（再掲）I argue that it is exactly the time for this amendment because let's think about it.（“Congressional Record” US Congress - 2006）
（私は今こそ改正すべき時だと主張します。そのことを考えるべきだからです。）

（10）（a）においては‘Let's’が従属節の中に現れており、いわゆる働きかけの機能は形式上前面には出ていない。ここではむしろ、話し手が抱く‘think about’への望ましさという一種の「評価」が述べられていると考えられる。働きかけの機能を持つ形式には、宮崎（2007）で＜まちのぞみ＞と言及されている、話し手の感じる望ましさが働きかけの前提として潜在する。’Let's’が従属節に現れた場合、働きかけの前提として潜在していた望ましさが顕在化すると考えられる。

COCAで検索すると“Because let's”の生起例は54例であり、そのあとに続く動詞は、face（30例）,say（５例）,talk（３例）, be（３例）, assume（２例）, listen（２例）, watch, understand, take, see, remember, look, go, come, bringがそれぞれ１例となっている。54例のうち、ほとんどがニュースショーのような番組内での口語の用例であり、わずか11例が新聞、雑誌、小説からのものである。書かれたもの11例はすべて‘Because let's face it’であった。

‘because’で導かれる従属節の中に現れる“Let's face it”は“we should accept the truth”（CAMBRIDGE INTERNATIONAL DICTIONARY of ENGLISH（1995）、あるいは“used for saying that someone must admit that a situation exists”（MACMILLAN English Dictionary（2007））と英語で説明されている、かなり慣用句化した言い回しである。

従属節で最も用例の多かった‘Let's face it’など、なかば慣用表現として用いられるようになったものは、目に見える動詞ではなく、思考動詞など目に見えない動作を用いたものである。こうした表現においては、‘Let's’の「勧誘」マーカーとしての機能がさらに抽象化され、実際に動作を共に行うわけではなく、気持ちの上でだけの「共同性」を表そうとする、いわば「共感」マーカーとして、‘Let's’の機能が拡張されていったと考えられる。その結果、こうした慣用的な表現は、実際的な共同動作に

対する働きかけ性を持たないため、主節の文頭に現れる必要がなくなり、比較的自由に文のあらゆる場所に、フレーズごと挿入されることが可能となったのではないかと考えられる。さらに、はじめはごく限られた慣用表現で可能になった統語的なふるまいが、その他のさまざまな動詞で可能になったと思われる。

一方、GBAEでも、1940年代の２例から20000年代の372例[2]まで、書籍の中での‘let's because’の用例がみられる。COCAと同様、‘because’と‘Let's face it ’との共起例が圧倒的に多いが、COCAでの書籍例でみられた慣用的な表現以外に、そのほかの動詞との共起例がみられ、例えば1947年の例では、‘try’と共に現れている。その他、口語を記録したものの中には、否定形を伴った次のような例も見られる。

（22）It is no good thinking you can just soak the rich, because let's not forget that the bulk of our taxes are not paid by the 60,000 very highly paid people in this country —
（富裕層から巻き上げれると考えても無駄だ。税金の大半がこの国の高給取り６万人で未払いだということを忘れてはいけない。）
（Conservative Party（Great Britain）Research Dept. “Daily Notes（General Electio）”1959）

（22）の例では、従属節の中の‘Let's’が主節に現れる時のように、否定形を伴って現れており、従属節の中で、より主節に近い機能を獲得しているようにみえる。

次の用例（23）～（25）は、上で述べたように‘Let's’が段階的に統語的な自由を獲得していき、従属節に現れるようになる段階に並んだものである。（23）から（25）へと、叙述的な傾きが増しているように思われる。

（23）One of the reasons I'm optimistic about the future of this country is because we have rule of law. Let 's face it . One of the great things that this country has that very few other countries have.（ Fox_Live /2011（111215））（私がこの国の将来に楽観的な理由の一つは、法律による統治があるからだ。そのことを認めよう。）

（23）ではなかば慣用的な表現‘Let's face it .’が独立した節として現れている。

（24）Let 's face it, skinny jeans do not look good on everybody, right?（ The Early Show　7 :00

[2] GBAEでは、‘because let's の用例数は、1950年代９例、1960年代29例、1970年代20例、1980年代43例、1990年代121例、2000年代372例となっている。

AM EST CBS /2008（080117））（事実を受け入れるべきですが、スキニ―ジーンズは誰でも似合うというわけじゃないですよね。）

（24）の例では、「スキニ―ジーンズは誰でも似合うというわけではない」という命題内容に対して、「私達はそのことを認めなければいけない」という話し手のコメントを述べていると考えられる。ここでは‘Let's face it’は、主節に添えられたコメントとして機能しており、聞き手に対する働きかけのニュアンスも感じ取られるものの、‘Let's face it.’に対する応答を求めているわけではない。

（25）But I think women are the ones who are going to be less-accepting of the idea of casual dressing. Because let 's face it, women like to dress -- dress-up.（NPR_Morning/ 2000（20001026））（でも女性はカジュアルな服装というのにはあまり乗り気ではないでしょう。認めるべきですが、女性というのは着飾るのが好きですから。）

（25）では、‘Because women like to dress -- dress-up. ’という理由の中に‘let's face it’というフレーズが挿入されているわけである。そしてこの‘Let's face it’はbecause節に挿入される場合には文全体の中にコンマではさまれた挿入節としてあらわれ、従属節の命題内容に対する話し手のコメントをさしはさんだ形になっている。

これが次の（26）のように、慣用的な表現で用いられる動詞以外の動詞が用いられるようになると、主節に対する従属節の命題内容の一部として機能するようになる。

（26）GIFFORD: Well, why are you bringing it up, Miss Journalism?
（さて、ジャーナリズム嬢、どうしてその話題を持ち出したのですか？）
KOTB: Because let 's listen to what William Shatner had to say about not being invited to the wedding.（NBC_Today /2008（081023））
（ウィリアム・シャトナーの、結婚式に招待されなかったことについての釈明を、あなた方に聞いてほしいからです。）

これらの例からは、‘Let's face it.’, ‘Let's be honest.’のような、目に見えない動作を表す動詞が用いられ、なかば慣用的に用いられるようになっている表現が、単独の文として用いられ、それが主節に対する話し手のコメントとして付加的な位置に現れるようになり、さらには、従属節の中に挿入されるようになるまで、働きかけの機能から叙述的な機能への傾きが連続的であることがわかる。

ところで、‘Let's’は、はっきりした社会的上下関係がある場合に、自分よりも上の立場の相手には使用しにくい傾向がみられる。また、自分と同等もしくは自分よりも社会的に下の相手に対しては

‘Let’s’を使うことで、「権威的な発話行為をカムフラージュする」“camouflage an authoritative speech act”（Biber et al.（1999））という機能がある。親しい者同士であれば、気の置けない「親密さ」を表すことができるという一面もあると考えられる。‘we should～’と意味的に置き換え可能な文脈で‘Let’s～’を使うひとつの理由はここに求められるだろう。

Huddleston & Pullum（2002）やHopper and Traugott（2003）で指摘されているように、‘Let’s’は‘Let us’の縮約形であるが、‘Let’s us’や‘Let’s you and I’などの形式で生じるときにはその意識が薄れ、‘Let’s’が単に「勧誘」マーカーとして機能していると考えられる。しかし‘Let’s get you～.’や‘Let’s get me～.’など、動作主体が話し手、あるいは聞き手のみであると解釈される文における‘Let’s’は、話し手と聞き手を動作主体とする行為を働きかける「勧誘」マーカーとしての機能は果たしていない。

（27）Speaking of food, let 's get me something to eat.（ ABC_20/20 2008（081215））
（食べ物と言えば、私に何か食べるものを持ってきて。）

（27）では、get の目的語が‘me’であるため、動作主体は聞き手であると考えられる。（27）では、‘Let’s’は働きかけではあるが、話し手と聞き手が共同動作主であることを示す「勧誘」マーカーとしてではなく、気持ちの上でだけの「共同性」を表していると考えられる。聞き手が話し手に食べ物を持ってくるという動作を行うことについて、話し手は実際には動作に加わらないけれども、Leech（1983）の「共感の原則」[3] にあるように、聞き手との関係において共感が最大限になるよう、話し手と聞き手が動作主体となる表現を選択していると考えられる。「話し手と聞き手は同等の立場」ということを形式として示そうとする「共感」マーカーのように機能していると考えられる。

‘Let’s’が、（27）のように形式上、話し手あるいは聞き手が動作主体の候補から外れることが明示されている（実際には‘Let us’を意味しない）文脈で「共感」マーカーとして使用されるようになり、それが次第に文脈とは関わりなく、‘Let’s’単独で「共感」マーカーとして機能するようになったと考えられる。そして、特に動作が目に見えない動詞を用いて、なかば慣用表現として定着した‘Let’s face it.’のような形式が、働きかけ性が希薄であるために、単文の文頭に現れる、という統語上の制約がゆるんで、比較的自由に文のあらゆる位置に現れることができ、従属節の例が生じると考える。こうした従属節の中の‘Let’s’は、形式上直接的な働きかけの機能は弱まり、叙述的な機能が生じるものの、「共感」マーカーとしての気持ちの上での共同性要求のニュアンスはなお存在すると思われる。

[3] Leech（1983）において述べられる「共感の原則」（b）では、「自己と他者との共感を最大限にせよ。」との記述がある。

６．日本語の「しよう」と英語の‘Let’s’における叙述的な機能の’対照

本節では、ここまでみてきた日本語の「しよう」と英語の‘Let’s’について、叙述的な機能を対照したい。

まず、叙述的な機能が生じる要因としては、日本語でも英語でも語用論的な条件が関わっていると考えられる。語用論的な条件とは、行為が遂行される「時」がいつであると文脈から判断されるかということ、また、動作主体が誰になるかという「人称」である。働きかけとして解釈されるための「時」と「人称」がずれた場合、叙述への傾きがみられる。行為が既に遂行されている場合、その行為の遂行を働きかけることはもはやできない。また、動作主体が３人称である場合には、聞き手とのやり取りの中で言及される３人称はその場にいないので、働きかけを行うことはできない。そのため、働きかけではなく、働きかけの前提となる望ましさを「評価」として叙述することになる。

英語では、働きかけとして機能する‘Let’s’は、主節に現れるのが通常の形であるが、従属節に現れる場合がある。近年用例が徐々に増えていると思われるこの用法においては、‘Let’s’が、Huddleston & Pullum（2002）やHopper and Traugott（2003）で指摘されたような独立した「勧誘」マーカーとしての機能をさらに拡張させ、実際の動作は伴わず、気持ちの上でだけの共同性を示す、いわば「共感」マーカーとでもいうような機能を持つに至っている。そのような用法においては、‘Let’s’がもはや目に見える動作に対する働きかけの機能をもたず、従って文頭に現れなくてはならない必然性をもたない。また、日本語では、「しよう」という形式が、しばしば終助詞「よ」を伴って話し手の「評価」を表し、２人称に対しては「非難」として、また、不特定多数を読み手とするインターネット上のブログなどでは、３人称へのコメントを「ぼやき」として表すことが可能になっているという特徴がある。聞き手との対話の中では、３人称に対する「しよう」は使用されない。

７．まとめ

本論文では、いわゆる勧誘表現として、日本語と英語それぞれの中心的形式である「しよう」と‘Let’s’について、叙述的な機能への傾きががみられる場合について考察を行った。

その結果、次のようなことが明らかになった。

１．英語と日本語の両方において、語用論的な条件としての「人称」が３人称にずれた時、どちらの言語においても話し手の命題に対する「評価」という叙述的な機能が認められる。
２．もうひとつの語用論的条件である、行為遂行の「時」に関しては、過去に対する英語の'Let’s'の叙述的な用法は、日本語ほどには見られないようである。
３．日本語の「しよう」においては、「時」が「過去」にずれた場合、また人称が３人称にずれた場

合の叙述的な用法が特に近年増えているようである。「時」と「人称」がどちらもずれた「合体型」も特にインターネットのブログなどでみられる。「しよう」は、聞き手との会話の中で過去の事象について言及する場合、主に「非難」を表す。その場にいない３人称に言及する場合には使われないが、インターネットのブログなど、不特定多数が読み手となる場面での３人称への言及では使用され、特に話し手の「評価」を「ぼやき」とでもいうようなコメントとして表す。

４．英語の'Let's'は、なかば慣用表現として定着した'Let's face it.'など、目で見ることのできない動作を表す動詞を用いた表現から機能を拡張し、共同動作ではなく、気持ちの上での共同性を示す「共感」マーカーとしての機能を持つようになったと考えられる。そうした'Let's'が、文のあらゆる箇所に現れることが可能になり、やがて慣用表現以外の動詞とも共起するようになり、その結果、従属節にあらわれることが可能になったと思われる。従属節に現れた'Let's'は既に述べたように、共同動作を働きかけるというよりは、「共感」を表すためのマーカーであると考えられる。

働きかけの機能から叙述的な機能への連続性については、今後さらに詳細な観察が必要である。

＜参考文献＞

尾崎奈津（2007）「日本語の否定命令文をめぐって」『日本語の研究』第３巻１号

仁田義雄（1991）『日本語のモダリティと人称』ひつじ書房

宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃（2002）『モダリティ』くろしお出版

宮崎　和人（2007）「＜まちのぞみ＞と＜発動＞の間」『岡山大学文学部紀要』48

安井　稔他編（1987）『例解現代英文法事典』大修館書店

山下由美子（2013）「＜非難＞・＜願望表出＞用法としての「しようよ」」第５回日本語教育研究会予稿集 ココ出版

Biber et al.（1999）The Longman grammar of spoken and written English. London:Longman

De Clerck. B.（2002）'On the pragmatic functions of let's utterances' Language and Computers, Advances in Corpus Linguistics.

G. N. Leech（1983）*Principles of Pragmatics*, London: Longman

Hopper, P. J. and E. Traugott（2003 ）*Grammaticalization*（２nd ed.）, Cambridge University Press

Huddleston,R.andG.K.Pullum（2002）*The Cambridge grammar of the English language*. Cambridge: Cambridge University Press.

John R. Searle（1969）*Speech Acts: An Essay in the Philosophy of Language*, Cambridge:Cambridge University Press

Paul Proctor et al.（1995）CAMBRIDGE INTERNATIONAL DICTIONARY of ENGLISH. Cambridge:Cambridge University Press

Rundel et al.（2007）Macmillan English Dictionary for Advanced Learners. London:Macmillan.

Scheibman,J.（2004）'Inclusive and Exclusive Patterning of the English First Person Plural:Evidence from Conversation' Language, Culture, and Mind

Quirk et al.（1985）*A CONPREHENSIVE GRAMMAR OF THE ENGLISH LANGUAGE*, London:Longman

〔付記〕本稿は2013年度に岡山大学社会文化科学研究科に提出した修士論文の一部をまとめ直したものである。辻星児先生、宮崎和人先生、片桐真澄先生より多くのご教示を賜りました。心より感謝を申し上げます。